

小

## 涙の媒介 採菊散人

現時第一流の諸名家に屬し、尤も經營接觸の餘に成れる妙作を揚ぐ、一驚自ら一驚の  
妙ありて、加ふるに名家の精妙なる揮毫を以てし、七情五味透徹あらざらしむ。

太陽1巻6号 1895年6月28日

記者曰、君は佐野庄なり、通称厚平、喜の號を山々亭有人といふ、東京市日本橋區是谷川町に生る。明治元年福地櫻痴居士と俱に江戸新聞を編して禁止となり同五年二月東京日々新聞を起し久敷く日報社に椅子を占めしが同十九年やまと新聞を起して以來同社を主宰せり實に幕府の世盛りより小説家を以て存在せる者は君一人なり。

近年女義太太夫といふものの一の流行物となり上手妙音と稱さるゝ者、屈指の男太太夫も爲めに壓せらるゝの勢ひなりしが安永曲の流派數種ありと雖も女の太夫にして男子を壓せし者曾て無かりしかど云へば然るにもあらず實曆の頃鶴賀八太夫と

言ふ者あり又の名を新内と稱し始め富士松蔭學の門人なりしが新内館といふ一流を起し劇場へも出諸侯の奥向き又は藏前邊の豪客杯へも招請せられ諸流の太夫を壓するの勢ひなりしが安永三年八月六拾晩歲にて物故せり其門人に加賀歲といふ者ありて盲人ながら節音聲ともに師に伯仲の技量あれば二世の新内となりて流行先師に譲らず、此新内に貳人りの娘あり姉は父の舊名を継ぎて加賀歲、妹を鶴吉と稱し姉妹共に技藝は親の仕込みとて優劣はあらざるも姉の加賀歲は泡瘡の病み重くして容貌醜くけれど妹の鶴吉は衣通小町も三舍を越るの美形なり殊に先師の

餘波として今的新内も諸方より招きを受れど自盲たるを以て時として貳入りの娘を名代に出せる事もありしが神代でも女で無ければ夜が明すト川柳點に穿ちし如く新内如何に美音なりとも法師の目言なり。然る美形なる名代に如かずして果は姉妹を名差で招待なすに至り其繁昌なる常磐津富本那といふ諸流の男太夫は所詮此姉妹が得る纏頭には遠く及ばざる者の如くなりき或日桜田久保町の清水樓に權門の靈應あり(因に裏す清水樓と云ふ)は其當時は都下第一に數へらるゝ割烹家にして寺相摸屋彦兵衛と云ふ骨董家が居宅の邊りから安政の始め迄は可なりに繁昌なし居りしが遂に退轉せり。客は或大膳の勘定奉行を勤むる浅尾頼母と其下司の小柴金七須藤與七郎貢物振り金澤源八風間信次郎等にて此靈應者は御出入り町人の吳服商伊勢屋新兵衛と馬具師の山田屋兼吉と云ふ者なり。其頃は新橋邊りにも藝者那と云ふ者無ければ深川の仲町より酌入を四名招き尚餘金として加賀鶴吉を聘し加賀家の三昧線にて鶴吉が當時の新作の彼蘭蝶を一段語りたるに縹緲は前にも記せる如く花も紅葉も取らふばかり其上音聲の美なる旭光に映る黃鳥は物かは布團の上に鉛を轉がせるに異ならぬ聽者耳と眼の聞きしと如何にせむ。彼淨瑠璃の終りて彼辰巳の里に名をしられし小蝶房八那といふ美形拍子が世辭と愛敵を捨一分に振りて酒間を執持されど今之の鶴吉に比較は花の邊りの明日檜根から興味はあらざりけり抑。此席の上客たる淺尾頼母と云ふは江戸家老浅尾修理の長男にて勘定奉行兼用人に見習ひにはあれど今之の君侯とは乳兄弟にて君侯が幼く部屋住にて在せし頃より御相手を勤めて陸間敷交りたる中合ひなれば今も御覽へ目出度して三拾萬石の一家中に及びなき權臣なるに文武の道も疎からず思慮分別もある者ながら性來の好

藤金澤等の宅を廻顧したるに須藤金澤は不在なりしが小柴金七は在宅にて兩人を與て通し。昨日は種々之作となりしとの一禮と述尙語を亞きて曰ふ先刻大夫が拙者へ内々御頼みがあつたが昨日馳走に出された新内の娘の鶴吉を頼母殿殊の外の御執心で淨瑠璃を止めて姿に出るならば親子は生涯困らぬ様に扶助をして遣す併し左様な理由にも有り不得心で有うと心得升殊に當時鶴吉は公に突出する杯と申す事は不得心で有うと心得升殊に當時鶴吉は宅に居る日は稀と申す程御座敷多で生活にも困りませぬから甘く承知をして呉れば宜うござい升が。今乃と其方の働きで甘く承知をさせて貰ひ度、無宜敷うござい升。尋常な事で参らばは些暴治療を致しても御望みの届く様に致しませう。然して貰ふとせう是は小柴様へ申上るもの恐れ入り升か事成りまして支度金とか何とか申す様な事で金が御入用の事がござりましたら一時御新俺は左様な事は不得手でござり升が。兼吉は始終藝人交際を致して相應に義理も出して居り升から何とか御都合になりませう。是は小柴様へ申上るもの承認をして支度金と申すもの。や

色家にて船房の修らざる爲め醜聲の戸に洩るゝ事無きにあらず謂て以て登庸の道を邇からしむるに至れりとぞ斯る持病を有する頼母なれば今鶴吉の美貌と美音を見聞て唯恍惚として見落居しが早津浦理を終りて鶴吉の席を退くや手の物を取れし如く失望極り無く何と不興氣なれば下司の人々が新兵衛兼吉等と云ふ骨董家が居宅の邊りから安政の始め迄は可なりに繁昌なし居りしが遂に退轉せり。客は或大膳の勘定奉行を勤むる浅尾頼母と其下司の小柴金七須藤與七郎貢物振り金澤源八風間信次郎等にて此靈應者は御出入り町人の吳服商伊勢屋新兵衛と馬具師の山田屋兼吉と云ふ者なり。其頃は新橋邊りにも藝者那と云ふ者無ければ深川の仲町より酌入を四名招き尚餘金として加賀鶴吉を聘し加賀家の三昧線にて鶴吉が當時の新作の彼蘭蝶を一段語りたるに縹緲は前にも記せる如く花も紅葉も取らふばかり其上音聲の美なる旭光に映る黃鳥は物かは布團の上に鉛を轉がせるに異ならぬ聽者耳と眼の聞きしと如何にせむ。彼淨瑠璃の終りて彼辰巳の里に名をしられし小蝶房八那といふ美形拍子が世辭と愛敵を捨一分に振りて酒間を執持されど今之の鶴吉に比較は花の邊りの明日檜根から興味はあらざりけり抑。此席の上客たる淺尾頼母と云ふは江戸家老浅尾修理の長男にて勘定奉行兼用人に見習ひにはあれど今之の君侯とは乳兄弟にて君侯が幼く部屋住にて在せし頃より御相手を勤めて陸間敷交りたる中合ひなれば今も御覽へ目出度して三拾萬石の一家中に及びなき權臣なるに文武の道も疎からず思慮分別もある者ながら性來の好

附に委細と心得斯と鶴吉に通じければ快よふ承諾を爲し山田屋と物産に招き鶴吉が席を去りてより大夫は御失望の様子なり折角の權門に肝心の大夫が不興では其方達の不利益なれば迷惑失望極り無く何と不興氣なれば下司の人々が新兵衛兼吉等を物産に招き鶴吉が席を去りてより大夫は御失望の様子なり折角の權門に肝心の大夫が不興では其方達の不利益なれば迷惑失望極り無く何と不興氣なれば下司の人々が新兵衛兼吉等の兼吉に伴はれて座敷へ来れば苦り切りたる頼母も忽ち笑みを作り、鶴吉が何うも面白い事で有つた、其方が今語り居た文句の中に四谷で始めて逢ふた時好たらしくと思ふたが因果な縁の何ントか申たの、身共に言すると清水で始めて逢ふ寺の鐘は亥の刻と報じけるに名残り惜くはあれど門限の時笑みを作り、鶴吉が何うも面白い事で有つた、其方が今語り居た文句の中に四谷で始めて逢ふた時好たらしくと思ふたがじや大夫が折角下さる御猪口を何故頂戴をせん御猪口ばかりでも戴かん歟、大夫でも御酒は誠に不調法で「コレサ何うしたモソチヤ酒が不可」ければ御猪口だけでも戴いて置け。翌日朝ラ捨置け酒は嫌ひか左様か夫なら身共に酌でもして、吳へト顔の縛りと打扇して鶴吉に見落居りたり然する中に時刻遅りて増上寺の鐘は亥の刻と報じけるに名残り惜くはあれど門限の時刻なれば又の再會を鶴吉に約し新兵衛兼吉等には丁寧の馳走なれば返しは附ん又た御坊主へ下さる、羽織とても其通り入札ばかり麻くとも品を落さるゝと坊主は人の悪い者だから彼は批難をされて詰り屋敷の損じやから今も申せし通り道度は入札法で無く仰せ附らるゝ積りじや、新ハイ有難い仕合せであり鶴吉の事は何分鄭むヨリハ委細承知仕りました

手前へ仰せ附らるゝ様偏に御執成しを願ひ升。小柴兼吉承知致して居る知りての通り近來は何事も入札法に成つて居るが御老若へ進ぜるゝ卷紗巻縮緬杯は假令見本を出した所で卷て終へば表面から善惡は分らんから若し不正な事がしてあると跡で取つて返しは附ん又た御坊主へ下さる、羽織とても其通り入札ばかり麻くとも品を落さるゝと坊主は人の悪い者だから彼は批難をされて詰り屋敷の損じやから今も申せし通り道度は入札法で無く仰せ附らるゝ積りじや、新ハイ有難い仕合せであり鶴吉の事は何分鄭むヨリハ委細承知仕りました

## 第二回

其の時より維新前迄は毎年五月廿八日は兩國の川開きと稱し割烹家船宿水茶屋邢とか應分の醤金を以て花火を打揚るを恒例とせり此日同所の繁昌たるや川の眞唯中に舟の航路を除くの外は船を以て水面を埋めたる如く西兩國は橋の袂より米澤町の袂當り迄は並び茶屋と稱する物あり此日は一人幾許費一帖何程と價を定めて花火の見物所と爲しが爲めに數軒の茶屋は立錐の地を餘さざるに至れり此日新兵衛兼吉は淺尾頼母を靈應の爲め小網町の川一丸とて川一番といふ星形船に揃そ差せ乗組の人々は此程清水樓に會せし小柴須藤金澤深川の藝妓三名及び加賀歲鶴吉の兩人なりき當時は腕車といふ簡便物あらざれば川一丸を沙留へ廻し置き各々未刻の番引より沙留に至れば船は山勝トかいふ船宿の川岸に着居りて一同之に乗り込み花火にはいまだ時刻の早ければ隅田川に漕着り豫て用意の者も暴たればとて今戸の金波樓に船を着て新たに舟を入れさせ頼母が好みとて鶴吉が

瑞雲の終れる頃舟は兩國  
川に戻りしが恰好好し花  
火と揚始むる時なりき  
因みに云ふ鶴吉が唄ひ

たる加賀節てふるのは

萬治寛永の頃中村勘三

郎座の俳優多門庄左衛

門、出來島小堺、花井

才三郎、玉村吉彌、玉

川仙之丞などいふ美男子が唄ひ始め一時流行して中絶

爲したのを加賀太夫が予が名に由縁あればとて唄ひ出

せしとなん其頃みなし栗といふ俳句の集に

からうたを加賀和や蛙かな

櫻 楽

奥

花火を揚終りたるは戌の下刻則ち今午後十時少しく前  
なり頼母等は例の門限を氣遣ひ元柳橋の大橋橋へ船を着  
一同上陸爲して米澤町の三浦屋といふ船宿にて休息し同  
家より一同駕にて大名小路の上屋敷へ戻りたり鶴吉加賀  
歳にも駕を遣らんと言ひたるを鶴吉等は少し寄り道があ  
ればと固く辭し姉妹手を引き合ふて同家を辭せしが其頃  
本所一目橋の向ふは御旅辨天松井町にて此邊は都で遊女  
屋町にてあり御旅とは一目橋通りを左りへ少し入り込み  
たる所に深川八幡の御旅所がありしゆゑ此邊を御旅と唱  
へ辨天とは今も同所に鎮めある辨天神社の近邊をいひ松井町は  
今尙同じ此遊女町は天保十三年岡場所御取拂ひの節断絶し新吉  
原町類焼の節に限り遊女屋の假宅を許さるゝ事あり此辨天前に  
賣來屋といふ引手茶屋ありしが其軒先に小腰を雇め此方に伊勢



新の若旦那が御出ですかと問ふ者は別人ならぬ鶴吉なりハイ先  
刻から御侍かねで彼爲在い升サア此方へ御出遊ばせと少女の案  
内に連て奥よりたる座敷へ至れば年の頃は廿五六なるべく色白  
やかに鼻筋通り口元は尋常なれど眼は大きく結城袖の單物に紺  
献上の男帶小紋の紺の羽織を袖疊にして脇に置き何やら小唄の  
本を讀居りしが夫を見るより本を脇に置き新<sup>ト</sup>是は鶴吉さんか  
思ひの外早かつたね越ち前はんが應待遠で御在だらうと思ツ  
て氣が氣じヤアありませんでした夫に元柳橋から上陸て米澤町  
の三浦屋からお客は駕で歸る吾僕達にも駕を遣うとお言被成ツ  
たノですが爰で駕を下りても駕が悪いからと思つて駕を斷ツて  
歩行て来ましたら何ソだか息が切れて仕方がありません新<sup>ト</sup>然  
か夫りヤア氣の毒千萬ナ然して姉さんは<sup>ト</sup>吾僕は爰へ来ると  
然して是非今夜達度といふ手紙が有つたが何ぞ急用か<sup>ト</sup>四五  
日跡に山田屋の兼さんから口で久保町の清水へ往ました所が  
お客は大丈夫様と下役の仁が四人お執持は兼さんに跡で聞ばお前  
はんの阿父さんださうです然するを昨日兼さんが家へ来て一昨  
日俺共が權門とした客は大名の御家老の御子息で實に飛鳥も  
落す様な勢ひの御仁で金は自由になるし唐から楊貴妃を呼ぶ事  
もすれば出来る御身分だが豫でこそあれ和女を萬端御執心で直  
に藝人を止めにして屋敷へ来て吳るなら親子や姉が生涯困ら  
様に扶助も仕様矢張藝人で居たくば外妾にして置ても宜と實  
に牡丹餅で御醫といふ好咄殊に此咄しが何等にか纏まれば俺  
も都合よしモウ壹人は長谷川町の新道に居る伊勢新といふ吳服

屋だが彼人の都合にも成る咄しだからと姉さんと阿父さんを並  
べて置ての御願み阿父さんの言ひ升には實は何時がいつ迄も藝  
人で置升より身が固まれば俺も安堵是も僕伴流儀の方は明日私  
が死ましても加賀歳が居りますれば其中には三代目を權者も出  
来ませうト言れた時に何う仕様かと思ひましたスルと姉さん  
が吾僕は壹人りの妹でござ升から假令共稼ぎに致しましても  
壹軒の家の女房となり升理由なら宜敷けれど妾側室に選る事は  
眞平御免を蒙りますと断然断はつたので少し座はまらけました  
が乃は兼さんも苦勞人丈け此事ばかりは親の威光で壓制する理由  
にも行まいから鶴さん篤り考へて御覽被成い、トキニ明後日の  
川開きには例の御仁を權門で屋形船で押出すのだから米澤町の  
三浦屋迄來てお吳と約束をして御歸りでした跡で姉さんが明日  
は霞が闇の御住居へ昇館の仕方も無いが明後日川開きの歸り  
に新さんに御目に掛けて篤り相談をして御覽と信切に言つて吳  
ましたので手紙を上げたのでしたが大きに御待せを致しました  
新<sup>ト</sup>夫りヤア好咄しちやアねへか和女を可愛がつて樂をさせて  
阿父さんや姉さんを生涯困らねへ様にして遣ると此様な上口を  
外すと折角來様とする運を取外すから何を差置いてる其玉の與へ  
乗るべし大刀打の出来る鞆當なら折吉原の夜櫻にと一幕出す氣もあ  
るけれども先方やア白柄組で無く正眞のダーラ大盡沙吹面の名  
通る思召なんですかト眼を据て新三郎を白眼たり新<sup>ト</sup>僕が此様に氣を揉ン  
から大刀打の出来る鞆當なら折吉原の夜櫻にと一幕出す氣もあ  
るけれども先方やア白柄組で無く正眞のダーラ大盡沙吹面の名  
古屋山三じやア出幕にならねへやナ<sup>ト</sup>新<sup>ト</sup>僕が此様に氣を揉ン  
でののち前はんは平氣なだけね新<sup>ト</sup>平氣でもねへが假令和女  
を傍の方へ引取タた所で師匠や姉さんを生涯生活するといふ理由中

少し遠く往ねへ 越何も其様に追ひ出でと宜じヤアありませんか 新追出しア仕ねへが姉さんが廻待遠だらうと思つてよし位の間が取てもござい升 新待るゝと侍身になるなどかで待といふものは長へものだ夫じヤア俺が二ツ目まで和女を送つて進様 鶴オ、嬉しい然してあ吳被成い

### 第三回

にも行ず娘は欲しいが何もする事も出来ねへどいふのじやア胃頭に咄しに取り掛る事が出来ねへ 鶴夫りやア父さんでも姉さんでも吾食を食物にして生涯左り圓扇で暮さうといふ卑劣な丁簡はありません現に姉さんは兼さんへ斷るのを假令俱様をしても一軒の家の女房ならばと言った位へすから前ほんが眞底吾脅を賣つて御吳ノ被成る氣なら誰か頬ソで早く言込ンで下さレ 新夫じヤア然仕様けれども僕の方でも第一誰歎を願ンで親父を説附けて貰はにやアならねへが親父も其大父の方の執持講中じヤア困つたものだがト暫時思案の躰なりしが新毒が變じて妻になる様あるとおどろくから寧馬具屋の兼さんへ實は斯々だと打明て頬ソだら俠氣な仁だから思ひの外此方の味方に成つて吳るかも志れず兼さんを味方にして親父を説附て貰つたら多分親父も承知を仕様と思ふ 鶴夫は好客事です家の阿父さんも兼さんから咄しを持って往ば否應無しに承知を仕升 新些言出し悪が悪いじヤアありませんか 新夫見ねへ和女だつて間が悪いやけれども皮切り炎を振られる氣で思い切つて遣つて見様鶴何卒然してあ吳被成い拜み升 新庵一人りで頬むより寧和女が一人りで序開きをした所へ和女が出て一緒に頬むといふ趣向に仕様 鶴せめて然して下さレ 新夫じヤア何日に仕様 鶴善は急げと言升から明日の晩は何うです新俺は宜が兼さんの都合は何うだか 鶴兔に角明日の晩方並び茶屋の小川迄來ませぬか断然して貰いませつ 鶴然すりヤア兼さんがウソと言升様に不動様を御願ひ申て置ます 新夫も宜ろう餘り空咄しだつたが何ぞお食か 鶴イエ何も欲しくはありません 新夫じヤア

は驚き 鶴さん何うして爰へ來た 新唯今御願ひ申掛けましたのも實は此鶴吉の事で 鶴ハテ夫じやア鶴さんが此程俺共が頬ソで居る事を断つて吳ろといふ咄しかね 新夫も然なり其外に少し御願ひ申度事もござりまして 鶴其外といふのは何だへ新實は俺が此鶴吉を女房に持度のでござい升 兼吉は其意外に驚きて暫時詞も無かりしが變て莞爾笑ひ 鶴若旦那和郎さんは鶴さんと疾から懲るにして居被成といふ理由がへト言れて白か明日は鶴吉の方から色よい返事が有だらうと待つて居た矢先へ轟から棒の媒酌人咄し夫丸で懸構の無へ入ならまだしも同じ媒酌人仲間の息子さんちやア何う手を着て宜か實に算で運動を始めた所が不圖鶴さんの媒酌人を仰せ附られて今まで妾に仕度と言被成るを振向いても見ねへて親方宜敷く放す理由に行めへ成るからねへかしらねへが悪い様にやア仕めへから種られへ丁簡を出しなさんヨトト聞て鶴吉は胸を撫下し 鶴吾脅ア親方に面目無くつて御挨拶も申上げませんで済ませんでした鶴吉が受合つて下すつたので張り詰て居た胸が一度透け様な氣が致し升何ぶん宜敷く御願ひ申升 鶴若旦那郎は散假者だ西の國で三拾萬石取る御家老の若大夫が一千金と言つて二の無へ鶴吉さん命を握て満度といふ男が出入り朋輩

人形町より酉町へ曲らんとする角に佃屋といふ割烹店あり彼會席料理といふ上等の向きにはあらざるも手輕で美味といふ今日で申せば淺草公園の松島の如く主人が自ら買出しに往き庖丁も探ると云るが呼るので粹とか通とか言ひ者には佃屋の料理を口にせざるを恥る程なりき其佃屋の表一階に吸物膳を前に猪口は各自に一箇宛膳の隅に置き酌取女は少し内談があればと座を外させたる客二人は例の山田屋兼吉と鶴吉が一世と晝ひし情夫の新三郎なり 鶴何かしらねへか若旦那の御馳走に成ちやア清ねへチ 新何う致しまして御用多の所を御呼立申て甚だ失禮で些折入つて親方に御願ひ申し度事がございまして兼何では是から阿父さんの名代に御屋敷廻りでも仕被成る事に就てかね新ハイ夫も御引き廻しを願はにやアなりませんが差當ツての御願ひは誠に申上げ悪うござい升がト領の汗を拭ひ居りたり然何が其様に被仰り悪いのですハア分ツた何所か花魁に墮ン被成つて廊の金には盡るが習ひといふ紋切り形で少し都合をして呉どでも言被成るのかね 鶴左様な理由でもございません實は口の頭迄出掛けど遂吞込んで又候額の汗を拭ひぬ紙門の蔭に聞居たる鶴吉は迂しがり紙門を開て其所へ出れば兼吉は

の息子さんは俺まで鼻が高へ様な氣がする、鶴さんの阿父さんは取て不承知も言つて呉めへが新兵衛さんを説のが骨だよ新「親の事を彼は申ては清みませんが分ら無く成り出すと無法に分らねへので毎度手古擢升から鹽御旗の御立になる事もございませうが御勘辨下すつて御氣長にち措合と御願ひ申升 鶴夫りやア長く交際つて居るから阿父さんの氣性も大概志つて居升から御心配にやア及ばねへ 新有難ふ存じ升 鶴和郎さんの御馳走に成つちやア清ねへが些少とは奢被成つても好筋の事だから御遠慮無く御馳走に成らせうト此話しも一團落附きたれば新三郎は手を鳴して下婢を呼び急いでち肴をと命じたるにぞハイと回答て變て持出たるは利休形の長盆へ桺來塗りの大鉢と孟子と竹の子の穂ばかりを甘煮と爲し七貫の手にはあれど無鉢青磁の小鉢に之を入れ同じく利休形の長盆に載せて持出たるを兼吉は一ヶ手を採りて右見 鶴爰の家は食物が甘へばかりと答へて左見 鶴爰の家は食物が甘へばかりで無く器は悉く盛りて御出でござい升 無何流を被成る下ハイ御茶が好で毎月二七に宗匠が香古に御出でござい升 無何流を被成る下ハイ御茶が好で毎月二七に御家の旦那は茶を被成るかね 下ハイ御茶が好で毎月二七に茶碗も中渡りでこそあれ島渡る主人は茶人と見ゆる 鶴姉さんは思つた料理屋の主人折は少し茶の氣があると同じ鉢でも甘く飲めるから仕方の無いものだと三人程能く食事を終り兼吉は手洗にて下へ往き帳場へ至りて勘定を爲さんと言ひたるを先刻伊